台大日本語文研究第 44 期
2022 年 12 月，頁 1-24
2022-09-08 收稿，2022-11-28 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202212_(44).0001

# 『三四郎』『那之後』的關聯性
## —由「借貸關係」的視角進行探討

范淑文*

## 摘要

眾所周知，夏目漱石的『三四郎』『那之後』『門』在故事的發展，或各主人公所面對的煩惱等層面來看，被視為夏目漱石前期三部作，此外，『三四郎』『那之後』中，各腳色之間的借貸或是男性對女性的金錢支援等，雖未達故事主題的層次，但是對故事情節的發展都有非常大的影響，不容忽視。

在『三四郎』當中，穿插的「借貸關係」是配角的與次郎跟美彌子借錢，但卻是美彌子透過三四郎把錢借給與次郎。『那之後』當中，代助為三千代夫婦籌錢、父親的生活援助或是這種關係下的婚姻的催逼等，可以看到各種形式的借貸關係。不僅主人公，各個登場人物都牽扯到，借貸關係以各種不同形式穿插在故事中，別具意義。

本稿首先就『三四郎』及『那之後』中各種形式的借貸或牽扯出的人物關係進行考察，其次論證作品中「借貸關係」的意義，探討其在故事情節發展中是否被做為某種策略？又發揮何種作用？是否可由此關係證明兩篇作品間的關聯性？

關鍵詞：『三四郎』、『那之後』、援助、「借貸關係」、策略

* 國立臺灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

# The Association Between *Sanshiro* and *And Then* : From the Standpoint of "Lending Relationship"

Fan, Shu-Wen*

## Abstract

It goes without saying that the development of story and having troubles of each leading characters etc. in *Sanshiro*, *And Then*, *The Gate* of Natsumei Soseki as the trilogy in his early period. What is more, the effective function cannot be overlooked for the development of story for lending relationships between each character as well as the association of money for the support to women from men etc. even though it is not a motif.

It appears that the incorporation of the lending as lending money to Mineko from the supporting character Yojiro through *Sanshiro* in Sanshiro, on the other hand, the diverse lending relationships could be discovered from the lending between Daisuke with his father due to marriage, life support from his father, financial arrangement for the couple of Michiyo in *And Then*. Accordingly, it is interesting to find out that lending relationships in different forms are woven into works for the association of lending from not only the leading characters but also various characters.

Thus, the study attempted to examine the relationship between characters etc. relating to various kinds of lending relationships in *Sanshiro* as well as *And Then* and clarify the issues about the connection between the two works based on the lending relationship, the function for

* Professor of Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

the development of story etc. as a strategy of “lending relationship” in the works.

Key words: *Sanshiro*, *And Then*, Supporting, Lending Relationship, Strategy

臺灣大學學術期刊資料庫

# 『三四郎』『それから』の関連性—「貸借関係」の視座より

范淑文*

## 要旨

夏目漱石の『三四郎』『それから』『門』はストーリーの展開やそれぞれの主人公が抱えている悩みなどから、漱石の前期三部作と見なされているのは改めて言うまでもない。それ以外に、『三四郎』と『それから』には各人物間の貸借、また男から女への援助など金銭が絡んでいることはモチーフとまではいかなくても、物語の展開に大きな役割を果たしていることを見落としてはならない。

『三四郎』では、脇役の与次郎に借金を求められた美禰子が三四郎を通すという形の貸借が織り込まれている。『それから』においては代助が三千代夫婦の為に金を調達したこと、また父親から生活の援助やそこからの結婚を迫られる代助親子間の貸借など様々な「貸借関係」を見出すことができる。こうして主人公のみならず、色々な登場人物が貸借に絡んでおり、「貸借関係」が様々な形で作品に織り込まれているのは興味深い。

本稿では、『三四郎』及び『それから』にあるそれぞれの形の貸借やそれに絡んでいる人物の関係などを考察した上、作品におけるそれぞれの「貸借関係」の意味、一種の策略としてストーリーの発展に如何なる働きとして果たされるのか、またそこから両作品のつながりが考えられるかなどの問題を明らかにすることを試みる。

キーワード：『三四郎』、『それから』、援助、「貸借関係」、策略

* 国立台湾大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

# 『三四郎』『それから』の関連性—「貸借関係」の視座より

范淑文

## 一、はじめに

夏目漱石の『三四郎』、『それから』、及び『門』は主人公の恋が結婚へと発展するなど内容面で三作が繋がっており、漱石の前期三部作[1]と見なせるのは改めて言うまでもない。そうした物語の主な展開以外に、『三四郎』及び『それから』においては、金銭の貸し借りに端を発した強者的立場と弱者的立場という人間関係の逆転劇が底流している。主人公の間における金銭の貸し借りに注目した研究者は少なくなく、秋山公男[2]をはじめ、斉藤英雄[3]、石原千秋[4]、遠藤祐[5]、江藤淳[6]などが挙げられる。詳しくは後述するが、それらの先行研究はいずれも美禰子の金を貸す側の心理や三千代の金銭の工面をする場面の仕草——代助との昔の思い出とされる「真珠の指輪」を見せようとする振る舞い——に注目している。しかし、『三四郎』では脇役の与次郎から借金の申し入れを受けた美禰子が三四郎を通した形での貸借を承認したことや三四郎の借金の返済の齟齬、また『それから』の場合は本来三千代夫婦の為にと代助が調達した金がいつの間にか三千代という一人の女性の為にと変ったこと、更には長きに渡り父親から生活の援助を受けている弱い立場のせいか、結婚を迫られる代助は、親との間にも平岡との間にも、それぞれ一種の貸し

1 吉田幸次郎（1954.3）「漱石三部作の世界」『文学』
2 秋山公男（1995.4）「『三四郎』小考——「露悪家」美禰子とその結婚の意味——」『漱石作品論集成 第 5 巻』（1991.1 一刷り）編者：玉井敬之・村田好哉、桜楓社
3 斉藤英雄（1995.4）「「真珠の指輪」の意味と役割—『それから』の世界—」『漱石作品論集成　第 6 巻』）編者：太田登・木股知史・萬田務、桜楓社
4 石原千秋（2010.5）『漱石はどう読まれてきたか』株式会社新潮社
5 遠藤祐（1995.4）「指輪のゆくえ—『それから』の〈物語〉—」『漱石作品論集成 第 6 巻』同前掲）
6 江藤淳（1981.11）「『それから』と『心』」『講座夏目漱石　第三巻』〈漱石の作品（下）〉三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳編、株式会社有斐閣

臺灣大學學術期刊資料庫

借り関係を見出すことができる。それらの「貸借関係」[7]から生まれた強者と弱者という人間関係が絡んでいるのは実に意義深い。単純な貸借関係にとどまらず、そこから変容した強弱な人間関係の問題こそがストーリーの構成を支えたりしている重要な設定と考えても良かろう。

よって、本稿では主人公のみならず、様々な登場人物との間にひそやかに進行していく強者的立場と弱者的立場の関係を一つの「貸借」――金銭にとどまらない「貸借」――と見做し、『三四郎』及び『それから』に織り込まれた広い意味での「貸借」の状況やそれに絡む人物の様子などを考察したうえで、作品において、この「貸借関係」がストーリーの展開に如何なる働きをもたらすのか、またその「貸借関係」から両作品にはどのようなつながりが考えられるかの解明を試みてみる。論を進める上で、金銭面での貸借を切り口に、その奥に秘める登場人物の強者と弱者の立場を含む広義の「貸借」へと話を進めていく。

## 二、『三四郎』の「貸借関係」―女から男へ

『三四郎』に盛り込まれた「貸借関係」は些か複雑である。第八章では、与次郎という脇役が主人公三四郎をはじめ周りの人々に懸命に金の無心をするが、あまり信用されないキャラクターである。そのような与次郎が広田先生から預かっていた金を馬券に入れあげたため、仕方なく三四郎に泣きつき、故郷から仕送されてきたばかりの生活費のなかから一時的に立て替えてもらった。しかし、約束の日になっても返せない状況に立たされていた与次郎は、色々と金の工面に走った。途方に暮れた揚げ句、美禰子が都合をつけてくれることになった。が、「あなたには渡せませんと云ふんだから驚ろいたね。僕はそんなに不信用なんですかと聞くと、えゝと云つて笑つ

[7] 例えば、「三千代は急に思ひ出した様に、此間の小切手の礼を述べ出した。（中略）彼はそれを、貸借に関係した羞恥の血潮とのみ解釈した。」(P167)のように、はっきりと「貸借」という表現が使われている。(『それから』の引用は『漱石全集 第 6 巻』1994.5、株式会社岩波書店による。以下同。)

臺灣大學日本語文學系

てゐる。厭になつちまつた。ぢや小川を遣しますかなと又聞いたら、えゝ小川さんに御手渡し致しませうと云はれた。」[8]（P481、482）と、与次郎は借金交渉当時の美禰子との会話の様子を三四郎に語った。一見、三四郎は与次郎に代わって単なるその金の受け取り人に見えるが、以下の二点で三四郎と美禰子の関係が微妙に変わったのがわかる。(1)「僕が馬券を買つたんぢやありません」／「あら、誰が買つたの」／「佐々木が買つたのです」（P491、492、改行を斜線で示す）という、三四郎と美禰子との会話から、金を馬券に使ってしまい、金に困っているのは三四郎だとばかり美禰子は思っていたことが伺える。(2) 返済の約束の段になっても、あれこれと理由を並べたてた与次郎について、「どうせ返す事はあるまいと思つてゐる。与次郎も決して返すとは云はない。たゞ返せない事情を色々に話す。」（P515）という、三四郎の諦めの心境が語られている一節がある。これらの事情から、三四郎が美禰子から借金することになり、二人の間には一種の「貸借関係」が成立していると捉えてもよかろう。金を受け取るために美禰子の家を訪れる時の三四郎の心理描写に注目してみよう。

> 美禰子の所へ行く用事が出来たのは嬉しい様な気がする。然し頭を下げて金を借りるのは難有くない。三四郎は生れてから今日に至る迄、人に金を借りた経験のない男である。其上貸すと云ふ当人が娘である。独立した人間ではない。(中略) 三四郎は此間から美禰子を疑つてゐる。(中略) 最後に嬉しい事を思ひ付いた。美禰子は与次郎に金を貸すと云つた。けれども与次郎には渡さないと云つた。(八の四)（P485、486、487）（下線部引用者。以下同。）

一般に男性は人に頭を下げて、殊に女性に金を借りるのは嫌がるが、三四郎はその役を引き受けたのだった。それには多少屈辱を感じるものの、内心はそうでもなさそうである。第六章では、よし子と一

8 『三四郎』の引用は『漱石全集 第5巻』1994.4、株式会社岩波書店による。以下同。

臺灣大學學術期刊資料庫

緒に見に行った運動会の会場で美禰子が野々宮と大変親しくしていることや、「宗八さんの様な方は、我々の考ぢやわかりませんよ。ずつと高い所に居て、大きな事を考へて居らつしやるんだから」（P456）と美禰子の野々宮のことを頻りに称賛した言葉を耳にしても、「さう云へば何だか、あの女から馬鹿にされてゐる様でもあ」（P457）り、「自分は美禰子に苦しんでゐる」（P461）と口にする三四郎の内心は、美禰子に信用されている点に美禰子に逢えた点を考え合わせると、意外にも喜んでいる。更に美禰子は前もって用意した金を渡すのではなく、「帳面と印形」を三四郎に渡し、30 円を引き出すよう頼み、その 30 円を「預かつて置いて頂戴」（P497）と言ったのである。そこまで三四郎は美禰子に信用されていたのだった。そして、美禰子は三四郎を丹精会の展覧会に誘った。そこで偶然にも画家の原口と野々宮に出会うというハプニングで三四郎と美禰子二人の姿勢や関係が一変してしまう。その二人の出現に気づいた瞬間、美禰子は突然三四郎の傍へ来て、「自分の口を三四郎の耳へ近寄せた。さうして何か私語いた。」（P500）それを目にした野々宮は三四郎に「妙な連と来ましたね」と言った。一方、美禰子は「似合ふでせう」と野々宮に挑発的な返事をした。にもかかわらず、その後、「野々宮さんを愚弄したのですか」（P504）という三四郎の質問に、「なんで？」と美禰子は「まつたく無邪気で」あり、「あなたを愚弄したんぢや無いのよ」（P504）と弁明をした。杉の下で雨宿りをしている時の「さつきの御金を御遣ひなさい」という美禰子の後ろめたい気持ちの反映した言葉に対して、三四郎は「借りませう。要る丈」（P506）と返事をした。美禰子は続けて「みんな、御遣ひなさい」と言った。後日、美禰子が原口のうちで肖像画「森の女」を描いてもらっているところへ行って、三四郎はその借金を返そうとしたが、美禰子は受け取らなかった。その帰り道の「御金は、彼所ぢや頂けないのよ」（P554）、「御金は私も要りません。持つて入らつしやい」（P555）などの美禰子の言葉を合わせて考えれば、貸す予定だった金はいつの間にか実質的に「上げる」という結果になったことがうかがえよう。

臺灣人學學術期刊資料庫

以上の登場人物の貸借の応酬からでは、(1) 完全な信頼関係に基づいた「貸借」(2) 20 円⇒30 円という金額の変更 (3)「貸す」⇒「上げる」という興味深いプロセスがうかがえる。そうした美禰子と三四郎の間の貸借について、村田好哉は、「金銭授受のモチーフは、その表面的な意味を越して漱石的主人公達における人間関係の変容を告げるもの」[9]だと捉えている。言い換えれば、普通のお金の貸し借りではなく、貸主である美禰子の心情が絡み、次から次へと状況が変化している。更に最初の借主である与次郎が全く除外されている。このことから、ストーリーの展開上美禰子と三四郎との「貸借」関係が必要とされていると考えてもよかろう。美禰子の心を読めず、その気持ちを全く理解できず、時々馬鹿にされている三四郎にとっては、その「貸借」によって、美禰子とつながり、何らかの関係を保つことができたという働きがあるのは明らかである。では、一方の美禰子にとっては三四郎は如何なる存在であろうか。原口に描いてもらった「森の女」という絵の構図——三四郎と池で邂逅した時の着物や扇子を持っているポーズ——や三四郎と様々な所で会った場面を全てしっかりと覚えている点から見れば、野々宮とは比べられないが、それなりに三四郎は美禰子が好意を持っている異性であり、野々宮に嫉妬させるには好都合の相手とされる[10]。そこから、一つの策略として美禰子が金銭を提供したと捉えることができよう。

一時的に二人の間で貸借関係が成立したが、美禰子に「愚弄」されていると改めて認識した三四郎は、その 30 円を返すために原口宅で絵のモデルをしている美禰子に会いに行ったが、「御金は私も要りません。持つて入らつしやい」(P555) と言われ、その後金縁眼鏡をかけた男が美禰子を迎えにきたことで、返し損なった。そして、

---

9 村田好哉 (1995.4)「『三四郎』の世界——「森の女」美禰子を巡って——」『漱石作品論集成 第 5 巻』(1991.1 一刷り) 編者：玉井敬之・村田好哉、桜楓社、P203

10 「金の貸借によって三四郎を束縛し、更に利己的自意識の網の中で「擒」にしようとする目論見が秘められているのである。」と秋山公男が指摘しているが、美禰子の立場のみによる捉え方であろう。秋山公男 (1995.4)「『三四郎』小考——「露悪家」美禰子とその結婚の意味——」『漱石作品論集成 第 5 巻』同上掲、P122

臺灣大學學術資訊

その後の演芸会では美禰子の結婚相手がますます明らかになっていった。その衝撃で三四郎はその晩ひどい風邪を引き、数日間寝込んでしまった。第十三章では、風邪が治った日に、教会へ行った美禰子に三四郎が借金を返そうと会いに行く場面が描かれている。二人の会話に注目してみよう。

「拝借した金です。永々有難う。返さう／＼と思つて、つい遅くなつた」と、

美禰子は一寸三四郎の顔を見たが、其儘逆らはずに、紙包を受け取った。然し手に持つたなり、納はずに眺めてゐる。三四郎もそれを眺めてゐる。言葉が少しの間切れた。やがて、美禰子が云つた。

「あなた、御不自由ぢや無くつて」

「いゝえ、此間から其積で国から取り寄せて置いたのだから、何うか取つて下さい」

「さう。ぢや頂いて置きませう」

女は紙包みを懐へ入れた。（P603、604）

美禰子の結婚は確定していった。美禰子とこれ以上かかわっても仕方がなく、それまで優柔不断だった三四郎は「何うか取つて下さい」とはっきりとした表現ができる姿に変身した。一方、美禰子の方も結婚が決まると、三四郎の存在もその「貸借」の必要性もなくなった。借金をとおして三四郎とつながっておく意味もないと見え、借金を包んだ「紙包み」を素直に懐に入れた。この瞬間から二人のかかわりは薄らいでいき、互いにそれぞれの道を歩み出したのであろう。

## 三、『それから』—複雑な「貸借関係」

『それから』において貸借関係と言えば、先ず三千代が代助に金の工面を相談しにきたことや、それを受けて代助が実家に打診したことが思い浮かぶだろう。それ以外にも一種の「貸借関係」と思われる登場人物の間の人間関係が作品に織り込まれていることを見落

臺灣人文學術期刊資料庫

としてはなるまい。以下、三千代と代助の間の金銭の「貸借」を端に、強者的立場と弱者的立場という人間関係にまつわる変わった形の「貸借関係」をも考察し、お金の貸主や借主に如何なる働きを果たさせているかなどを明らかにしてみる。

**（一）三千代と代助との間の「貸借関係」**

『それから』のストーリーは平岡と三千代夫婦がほぼ四年ぶりに勤務先の大阪を引き払って､上京してくるところからスタートする。大阪での部下の不始末で責任を取らせられた手前、平岡は東京では暫く就職できないし、生活は切り詰められている。引越しの費用も出せないほど窮地に立たされているなか、裕福な生活をしている代助に三千代が助けを求めた。金銭の工面を頼みに来た三千代の様子は次のように描かれている。

（1）三千代は今代助の前に腰を掛けた。さうして奇麗な手を膝の上に畳ねた。下にした手にも指輪を穿めてゐる。上にした手にも指輪を穿めてゐる。上のは細い金の枠に比較的大きな真珠を盛つた当世風のもので、三年前結婚の御祝として代助から贈られたものである。(P63)

（2）「実は私少し御願があつて上がつたの」

疳の鋭どい代助は、三千代の言葉を聞くや否や、すぐ其用事の何であるかを悟つた。(中略)「少し御金の工面が出来なくつて？」三千代の言葉は丸で子供の様に無邪気であるけれども、両方の頬は矢つ張り赤くなつてゐる。（P65、66）

金の工面を求めに来た三千代の着こなし、結婚する時に代助にもらった「御祝」の真珠の指輪を手につけてその貸主である代助の前に座っている姿はこれまでよく研究者に注目されている。しかもその代助からもらった真珠の指輪を付けた手はもう一本の手の上におき「膝の上に畳ねた」という描写が意味深い。まず斉藤英雄は「夫平岡ではなく、友人代助が人妻三千代に与えた「真珠の指輪」が「それから」以前の世界、並びに「それから以後」の世界の出来事に関係し、各場面でそれぞれ意味と役割を持っていることが明らかにな

臺灣人學學術期刊資料庫

ったであろう。」[11]とあるように、真珠の指輪及び小切手の役割を見ている。真珠の指輪などに対する斉藤英雄の捉え方を石原千秋は高く評価し、「それだけのことで、三千代が代助を結婚以前の世界に引き戻そうとしていると言うのだ。有り体に言えば、「誘惑」である。」[12]と指輪及び三千代の一連の仕草についての見解を示している。そして、遠藤祐はさらに生計の為一時期指輪を質屋に抵当に出したり、後代助からもらった紙幣で指輪を買い戻したりした三千代の行為に注目して、「十二章から十三章へかけての経過のなかに、指輪のたどる、真珠から紙へそしてふたたび真珠へという〝変容〟のプロセスを、われわれは認めていいのではないか。」[13]と見なしている。記念すべき真珠の指輪を嵌めて代助に見せようとする三千代の仕草は、いかにもわざとらしい行為で、代助に昔の思い出を喚起させようとする意図である読み方は疑いの余地がなかろう。ただし、小稿では貸借関係に重点を置くため、ここでは、指輪や三千代の仕草以外に、代助のところに人妻である三千代が借金に来るという設定にも注目したい。

本来ならば、生活の苦境を打開するために一家の経済を支える家長である平岡が金の工面に奔走するべきであるが、女性という弱い立場の妻である三千代が平岡の代わりに金の工面に走ったという設定は実に意味深い。第十四章に描かれている代助が三千代に告白する有名な場面では、「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。」（P279）という代助の告白に対し、「何故棄てゝ仕舞つたんです」という三千代の答えから三千代が平岡と結婚する前、代助と二人が相思相愛していたことが伺えよう。そうした昔の恋人である三千代の口から出された助けを代助が断るはずはないと平岡は計算していたと十分に考えられる。その平岡の狙いの通り、漸く「少し御金の工

[11] 斉藤英雄（1995.4）「「真珠の指輪」の意味と役割―『それから』の世界―」『漱石作品論集成　第 6 巻』同上掲（初出「日本近代文学」29、1982.10）P139
[12] 石原千秋（2010.5）『漱石はどう読まれてきたか』株式会社新潮社、P250、251
[13] 遠藤祐（1995.4）「指輪のゆくえ―『それから』の〈物語〉―」『漱石作品論集成 第 6 巻』同前注）（初出：フェリス女学院大学国文学会「玉藻」24 号、1989.3）

臺灣大學學術

面が出来なくつて？」（P66）と訪問の目的を口にした三千代の様子を見て代助は不憫に思い、力になってあげたくなった。しかし、提示された五百円という大金どころか、「実際自分は一文もない。代助は、自分が金に不自由しない様でゐて、其実大いに不自由してゐる男だと気が付いた。」（P67）そこで初めて現実の厳しさを正視させられた代助は、実家に生活費を支えてもらっている身の上でありながらも、三千代の金銭工面を実家に求めるしかなかった。

かつての代助との思い出を想起させようとする三千代の行いは更に続く。代助から二百円の小切手を受けた数日後、「銀杏返を結」っている三千代は、代助と共有するもう一つの思い出となる百合の花束を下げて代助のうちに現れた。

> 其百合をいきなり洋卓の上に投げる様に置いて、其横にある椅子へ腰を卸した。さうして、結つた許の銀杏返を、構はず、椅子の脊に押し付けて、
>
> 「あゝ苦しかつた」と云ひながら、代助の方を見て笑つた」代助は手を叩いて水を取り寄せ様とした。三千代は黙つて洋卓の上を指した。其所には代助の食後の嗽をする硝子の洋盃があつた。中に水が二口許残つてゐた。(P163)

百合の花を「投げる様に」置いたり、「椅子の脊に押し付け」たりする仕草は、夫以外の男性に対する人妻の行為とは思えないほど馴れ馴れしい振舞いであった。更に代助が食後の嗽に使ったコップでそのまま水盤にある水を掬って飲んだ。煽情的な行動の連発であった。暫くしてから漸く今日訪れた目的を語った様子は次のように描かれている。

> 三千代は急に思ひ出した様に、此間の小切手の礼を述べ出した。其時何だか少し頬を赤くした様に思はれた。視感の鋭敏な代助にはそれが善く分つた。彼はそれを、貸借に関係した羞恥の血潮とのみ解釈した。そこで話をすぐ他所へ外した。(P167)

先日工面してもらった二百円の小切手のお礼、及び折角調達してくれた御金を予定の返済に使わず、平岡に別の用途に使われてしま

臺灣大學學術期刊資料庫

ったことについて、三千代がお詫びをした場面である。その三千代の表情に「貸借に関係した羞恥」を代助は察した。そこで、

「何うせ貴方に上げたんだから、何う使つたつて、誰も何とも云ふ訳はないでせう。役にさへ立てば夫で好いぢやありませんか」と代助は慰めた。さうして貴方といふ字をことさらに重く且つ緩く響かせた。三千代はたゞ、

「私、夫で漸く安心したわ」と云つた丈であつた。(P172)

と、少しでも三千代の恥を和らげようとするつもりだったろうか、代助は「貴方に上げた」とその「貴方といふ字」を強調した。否、平岡夫婦というより、三千代という女性に代助は金銭の援助をしたと言った方が適切であろう。かつて愛していた女性、三千代を労わる代助の気持ちがここではっきりと語られている。昔互いに気があった二人がそれぞれ異なる形で相手に気持ちを示そうとしている様子がうかがえよう。それに、上掲のようにそのお礼を言いに来た日にも三千代が一人で、二人の思い出の百合の花を持ってきている。ここまで来ると、その「貸借」は金銭関係（平岡×代助）⇒かつての恋心（三千代×代助）に置き換えられたのが見えて来た。代助と三千代との間の変容した「貸借」は更に続く。

代助は其夜九時頃平岡の家を辞した。辞する前、自分の紙入の中に有るものを出して、三千代に渡した。其時は、腹の中で多少の工夫を費やした。彼は先づ何気なく懐中物を胸の所で開けて、中にある紙幣を、勘定もせずに攫んで、是を上げるから御使なさいと無雑作に三千代の前へ出した。（P206）

実業家佐川の娘との縁談が迫ってきた状況のなかで、代助の三千代への思いはますます高まっていた。この日の夕方には、平岡は留守であり、下女も最初のうちどこかへ行って留守であった。つまり二人きりだったのである。今回は懐にある紙幣を出して三千代に「是を上げるから御使なさい」と、表現が「上げる」とはっきり変化した。ここでは見落としてはならないのは、こうした「貸借」関係が築かれているプロセスには、平岡が意識的に仲間はずれにされたよ

臺灣人學學術期刊資料庫

うな構図になっている点である。言い換えれば、関係の再構築という隠蔽されていた目標に向かって、その「貸借」がかつて互いに恋心を抱いていた代助と三千代の間で進められてきたという不可視的な意図がうかがえよう。

そして、とうとう、時機が熟した。昔の思い出の回想を唆した三千代への答えとして、代助は百合の花を一杯飾った部屋に三千代を招き、そこで「僕の存在には貴方が必要だ。何うしても必要だ。」（P279）と告白した。一方、三千代の方も、「何故棄てゝ仕舞つたんです」「残酷だわ」と、漸くこの日が到来したような心境を吐露した。二人のかつての愛の証である百合の花に囲まれながら、二人で互いに愛を確め、固めたのである。

平岡夫婦と代助、この三人の間で進められてきた金銭関係をストーリーの進行順にもう一度整理してみよう。

平岡の借金返済のために金の工面を代助に頼る⇒
家長である平岡の代わりに三千代が代助に金の工面を頼む⇒
代助は調達してきた 200 円を三千代に渡した⇒
数日後その借金だった 200 円を三千代に「上げた」と代助が言う⇒
更に「懐中」にある「紙幣」を全て三千代に「上げた」⇒
百合の中で代助が三千代に愛の告白をする

というストーリーの進行からでは、それまでの「貸借」行為は愛の成就に大きな働きを果たしていたことは明らかであろう。その前に、「貸借」関係の進行の助走のように、三千代が代助からもらった結婚の御祝いとしての「真珠の指輪」や二人の昔の思い出のシンボルとしての百合の花をふんだんに使い、それぞれ愛の成就の役割を働かせたのも無視できない。三千代も代助と同じ、否、代助以上だったかもしれないが、その「貸借」関係を最大限に利用し、平岡、三千代、代助という三人の関係を新たに築き上げられるように仕向けたとも考えられよう。ただし、「いわば、三千代は、代助の人工的・美的生活を破壊しようとする「宿命の女（Femme Fatle）として登場

臺灣大學學術期刊資料庫

させられているといわなければならない。」[14] という江藤淳の指摘のとおり、その代償として、代助はそれまでの裕福な生活の支援が絶たれ、三千代と代助の二人は平岡を始め、父親、社会と戦わなければならない羽目になってしまったのである。

**（二）男同士の「貸借関係」**

前節で触れたように、平岡は大阪での部下の不祥事の始末や自分の道楽で作った借金を返済するために、生活の裕福な代助に金銭の工面を求めた。が、自分の代りに三千代を行かせた。代助が都合をつけた 200 円を平岡家に届けた数日後、「ハイカラに取り繕ろつて」いる平岡が代助の所へやってきた。二人の会話の様子が次のように語られている。

> けれども自然に出る世間話といふよりも、寧ろある問題を回避する為の世間話だから、両方共に緊張を腹の底に感じてゐた。
>
> 平岡は三千代の事も、金の事も口へ出さなかつた。従つて三日前代助が彼の留守宅を訪問した事に就ても何も語らなかつた。代助も始めのうちは、わざと、その点に触れないで澄してゐたが、何時迄経つても、平岡の方で余所々々しく構へてゐるので、却つて不安になつた。
>
> 「実は二三日前君の所へ行つたが、君は留守だつたね」と云ひ出した。（P137）

代助は平岡のために自分の感情を押し殺して三千代との結婚を斡旋するほど、昔二人は仲がよかったが、大阪から引揚げて上京して以来、つまり物語が始まった早々、二人の間には、例えば「今の彼は左程に友達を重くは見てゐまい。」（P97）という代助の心情が語られたり、「不思議に不愉快な眼をして、代助の顔を窺つた」（P105）という平岡の方の態度が言及されたりしている。上掲の引用文には、「両方共に緊張を腹の底に感じてゐた。」「平岡の方で余所々々しく構へてゐるので、却つて不安になつた。」と、更に互いに敵対してい

[14] 江藤淳（1981.11）「『それから』と『心』」『講座夏目漱石 第三巻』〈漱石の作品（下）〉同上掲、P77

臺灣大學學術期刊資料庫

るような空気が漂っていることがはっきりと語られている。金の工面をつけてくれた代助に平岡はお礼を言うべきであるが、その話題や三千代の話題をわざと避けているようにも見える。一方、貸主である代助の方は本来なら堂々と平岡に接することができる強者的立場にありながら、平岡の留守中に訪問したという後ろめたさであろうか、「余所々々しく構へてゐる」平岡の態度に、却つて不安を感じている。そして、漸く、「実は二三日前君の所へ行つたが、君は留守だつたね」と代助の方からその話題を切り出した。しかし、「其節は又難有う。」「彼奴があまり心配し過て、つい君に迷惑を掛けて済まない」という平岡の冷淡な応対で、この場面では貸主と借主という貸借関係が話題を左右するほどの存在には至らなかった。

さて、平岡は新聞社に就職できたが、平岡家の生計は一向に改善されなかったことを感じた代助はその後また、平岡の留守中に三千代に逢いに行き、生活の足しに三千代にお金を「上げた」。寂しい思いをしている三千代のために何かしたく、代助は新聞社へ赴き、平岡にも会いに行った。近くのレストランで会ったが、以下のように平岡が挙げた話題は意図的な内容と思われる。

（A）「僕は経済方面の係りだが、単にそれ丈でも中々面白い事実が挙がつてゐる。ちと、君の家の会社の内幕でも書いて御覧に入れやうか」

（B）「書くのも面白いだらう。其代り公平に願ひたいな」と云つた。

（C）平岡は此時邪気のある笑ひ方をした。（P238、239）

（A）は平岡（B）は代助それぞれの発言であり、（C）は地の文である。平岡は経済関係の記事を担当しており、その不祥事には、代助の父親の会社が関わっていると代助に漏らしている。「面白い事実」という平岡の言葉遣いを、地の文の「邪気のある笑ひ」という表現と合せて考えれば、その不祥事めいた記事に代助の父親が関わっているのを平岡が決して好意的に忠告しているのではないことは明らかであろう。代助は父親を尊敬してもいないし、寧ろ父親のやりか

臺灣大學學術期刊資料庫

たを批判的な立場でみている。しかし、代助の生活の支援者である父親の事業が倒れたら、実際問題代助の生計も立たなくなる。その連帯関係を念頭にしっかりと置いている平岡――代助とは貸借関係にある借主である平岡――が、その関係の根幹にある代助の父親を倒すような行動をとるのは意味深い。

ここでは一種の男同士の権力闘争のような戦いと捉えられよう。本来なら弱い立場の借主である平岡が、強い立場の貸主である代助――その背後のスポンサー――を打倒することによって自分を強い立場に変える企てとして捉えられる。父親の価値観に常に批判的な姿勢を構えている代助は自分の生計を意識しているせいか、「公平に願ひたいな」と平岡に言ったのである。

平岡は生活の苦境を打開するため、金の工面に三千代に奔走してもらったのは三千代を「貸借」の道具として使い、引き続き相手の弱みを掴んで自分を強い立場に変えることを巧みに企てた。そのような策略で弱い立場に立たされるはずの平岡は少なくとも心理的に、強い姿勢を構えることができたのである。平岡はそうした策略を昔からあった三千代、代助との三人の関係解決に徹底的に使ったと言える。結婚後の三千代が変ったと平岡が頻りに批判したり、三千代をあまり労わっていない状況にもかかわらず、代助から三千代との愛を認めてほしいという要求には応じず、逆に「遣る。遣るが、今は遣れない。」（P331）という形で代助を苦しめるのである。平岡が三千代を「貸借関係」に使ったり、三千代を道具として代助を苦しめることを通して、代助との「貸借関係」から逆転して自分を強い立場に変えたのは明かであろう。「君と僕とは何にも関係がないんだから。僕は是から先、君と交渉があれば、三千代を引き渡す時丈だ」（P333）という代助に宣言した平岡の言葉からも、三千代は一種の「貸借関係」――男性の権力競争――の道具として使われていることがうかがえよう。

**（三）代助と父親との間の「貸借関係」**

物語は平岡夫婦の上京から始まると述べたが、それに先立って、

臺灣大學學術期刊資料庫

苛立っている代助の不安が語られている。ストーリーが始まって早々、代助は父親に呼び出され、「金は今迄通り己が補助して遣る。おれも、もう何時死ぬか分らないし、死にや金を持つて行く訳にも行かないし。月々御前の生計位どうでもしてやる。」(P38)「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不体裁だな」（P39）と、はやく就職しろと説教されている。とはいえ、毎月の父親からの支援を当たり前のように受け取っている代助はそれがあるからこそ優雅な生活ができることをあまり意識しておらず、有難いとも左程感じていない。しかし、三千代から 500 円の工面を頼まれ、力になって上げたいと思った瞬間、代助は自分が「一文もない」ことに気づき、「自分が金に不自由しない様でゐて、其実大いに不自由してゐる男だ」という現実を改めて感じた。その金の工面を嫂に相談したら、「さうね。けれども全体何時返す気なの」（P117）と予期もしなかった質問をされ、代助はその返事に戸惑った。

ここでは、父親からの生活の支援を当たり前だと思っているのと同じく、嫂への借金は返済につながるという一般の常識を代助は持っていなかったようである。そのような現実がストーリーの進行につれ、どんどん明らかになってくる。代助が実家に呼び出されたのは実は縁談が持ち上がっていたことを後から知らされた。縁談の相手は佐川という実業家の娘で、代助の父親の事業に大いに役立つ存在であることも代助はうすうすと感じている。そして、第九章で、代助は再び父親に呼び出された。

> 代助は次に、独立の出来る丈の財産が欲しくはないのかと聞かれた。代助は無論欲しいと答へた。すると、父が、<u>では佐川の娘を貰つたら好からうと云ふ条件を付けた</u>。 (P150)

一般の人と同じく、代助も「無論」「財産」が欲しい。その答えを聞いた父親が「では佐川の娘を貰つたら好からう」という条件を付けたことは興味深い。「では」という条件の接続詞から、財産、言い換えれば生活のサポートには、今回の縁談――実業家である佐川の娘との結婚――の承諾という必須条件が付いていることがうかがえ

臺灣大學學術期刊資料庫

よう。さもなければ財産が得られないし、これまでの生活の支援が絶たれてしまうということになる。すなわち、それまでの父親からの支援が一種の「貸借」――父親が貸主、代助が借主という「貸借関係」――であることに代助は気づかなかったと言えよう。代助は甘んじて無償資金提供と勘違いしていたとしか言いようがない。そのような代助であるため、嫂に 500 円を調達してもらう時に聞かされた返済という言葉などは毛頭もなかったことは納得できよう。

いよいよその結婚を決めないといけない時がやってきた。

> 彼は隔離の極端として、父子絶縁の状態を想像して見た。さうして其所に一種の苦痛を認めた。けれども、其苦痛は堪え得られない程度のものではなかつた。寧ろそれから生ずる財源の杜絶の方が恐ろしかつた。（P224）

苦境に迫られている代助は、はじめて自分が父親に甘えることで招いた結果を正視してみた。そして、代助にとっては、絶縁されることも一種の苦痛であるが、「それから生ずる財源の杜絶の方が」もっと恐しいことだと感じたのである。父親が押し付けようとする佐川の娘との結婚を「政略的結婚」と代助は名付けている。つまり、代助への生活援助をすることで一種の前払いのような「貸借関係」――その中に「貸借」が策略として巧妙に織り込まれた関係――を父親に作られたのであろう。

水田宗子は、「家庭－家族とは、日常の現実でありながら、メイクビリーブなヴァチャルリアリティなのでもあり、そこに居場所を求めながら、そこからの脱出を夢見る二重性をもって成り立っている。『それから』『門』『こゝろ』の世界と、『道草』の世界もまた、表裏一体をなして、漱石の家庭－家族の世界を構成している。」[15]と、漱石文学の中に語られている個とシステムとの関係について言及している。生活の支えの「居場所」である実家というシステムに甘えながら、その「居場所」の提供者である父親から代償返還のような結婚支配、システムの束縛から脱出したい、という二重性を代助の身

[15] 水田宗子（1997.11）「夫婦の他者性と不幸―漱石の〈恋する男〉と〈家長〉」（『漱石研究 特集漱石と家族』第 9 号、翰林書房、P37）

臺灣大學學術期刊資料庫

に明らかに見出だすことができよう。そこで、一時期揺れていた代助は、三千代の予想以上の強い意志に動され、父親との「貸借関係」から脱出し三千代と力を合わせて戦っていこうと決心したのである。父親が敷いていた親子間の「貸借関係」がこれで崩れてしまったのである。

## 四、おわりに

以上、『三四郎』及び『それから』に織り込まれている様々な形の「貸借関係」を考察してきた。意外に「貸借」の対象や中身が置き換えられたり、「貸借」を一種の策略として利用されたりしていたことがうかがえた。以下のようにまとめてみよう。

（1）置き換えられる「貸借関係」:

『三四郎』——

借金の借主が本来の与次郎からいつの間にか三四郎に置き換えられ、そして相手が三四郎であるためか、予定の金額が 20 円から 30 円に変わった。更に返さなくていいような素振りまで美禰子はみせた。それは貸主の借主への信頼、不可視的な特別な感情、あるいは何か後ろめたさがあった場合の表現と捉えられよう。

『それから』——

借主であるべき平岡の要望、或は命じられたかは定かでないが、妻である三千代が代わりに金の工面を平岡と三千代二人の共通の“友人”である代助に求めた。この借主の変更によって、元来単純な「貸借関係」が複雑で深刻な男女関係にまで展開していった。これは金の工面のため、元々妻三千代に好意を持っていた代助の所に三千代を行かせるのが好都合だと企てた平岡には最初から考えようもしなかったものではなかろうか。

（2）一種の策略として交わされる「貸借」

『三四郎』——

美禰子が金の受取人を三四郎と指名した本音は、野々宮ほどには至らないが、好感を持っている三四郎への好意の証と見なすこ

臺灣人學學術期刊資料庫

とができる。一方、受取人、つまり借主となった三四郎は美禰子に近づこうとする口実として利用し、その役を引き受けたのである。とはいえ、美禰子の結婚が明らかになるにつれ、その策略である「貸借」(或は美禰子が「使ひなさい」という“上げる”)の意味がなくなり、三四郎が返済してきた金を美禰子が素直に受け取ってしまったのである。

『それから』――

平岡は妻三千代への昔の代助の愛情を利用し、一種の策略を図り、自分の代りに三千代を金の工面に行かせた。のみならず、代助の三千代への感情や代助の父親の会社の不祥事めいた記事の報道を一種の策略として、元来借主である自分の弱い立場を強い立場に逆転させた。ここからは男性同志の間に隠されていた権力の闘いが浮き彫りにされたのである。一方、代助は父親が持ち込んできた事業家の娘との縁談を通して、自分が今まで受けて来た生活の支援が無償援助ではなかったこと、前払いの条件付きの「貸借」であったことを強く認識させられた。そこから、三千代の支えでその「貸借関係」を破壊し、古い父権システムから脱出して三千代と力を合わせて父親を始めとする社会と戦っていこうと決心したのである[16]。

以上述べてきたように通常の金銭上の貸借問題に留まらず、そこから派生してきた強者的立場と弱者的立場の変わった形が織りなす物語が浮かび上がってきた。明治大正期の近代化により「個」の芽

[16] 芹沢俊介・小森陽一・石原千秋三人による「ゆらぎの家族」と題した対談のなかで、小森陽一は「明治という時代は(中略)家と国民支配の一番末端の組織として位置付けることによって、非常に強力な上意下達式の社会システムを作った時代だったわけです。それに対する反発が、漱石の書いたすべての小説にあらわれている。」と、明治時代の知識人が背負っている家の重荷やそこから逃れようとする気持ちを当時の作家、特に漱石の作品を通して言及している。(芹沢俊介・小森陽一・石原千秋(1997.11)－対談「ゆらぎの家族」(『漱石研究 特集漱石と家族』第9号、翰林書房、P7)一方、山下悦子は「老若男女ともに「個人主義」が発達し、各自が「個性」を重要視するようになれば、親子、夫婦、親類などの血縁を共同性も崩壊せざるを得ないというのが、この未来記の考え方だった。」とあるように、つまり家庭や家族が崩壊していく必然性を主張している。(山下悦子(1997.11)「夏目漱石と家族」『漱石研究』第9号、翰林書房、P42)

生えが叫ばれていたこの時期において、『三四郎』の女性⇒男性へ、『それから』の男性⇒女性へ、男から男へという「貸借関係」及び代助の父親との「貸借関係」からの脱出への三千代の協力などの描写から、社会のシステムからの離脱を図ろうとする「個」の拡大や、その「個」の中に隠蔽された女性の働きの面に視座を据えるなら、『それから』は『三四郎』の進化版と見なすことも出来よう。

**【テキスト】**

夏目漱石『漱石全集　第 5 巻』1994.4、株式会社岩波書店
夏目漱石『漱石全集　第 6 巻』1994.5、株式会社岩波書店

**【参考文献】**

秋山公男（1995.4）「『三四郎』小考――「露悪家」美禰子とその結婚の意味――」『漱石作品論集成　第 5 巻』（1991.1 一刷り）編者：玉井敬之・村田好哉、桜楓社
石原千秋（2010.5）『漱石はどう読まれてきたか』株式会社新潮社
江藤淳（1981.11）「『それから』と『心』」『講座夏目漱石　第三巻』〈漱石の作品（下）〉三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳編、株式会社有斐閣
遠藤祐（1995.4）「指輪のゆくえ――『それから』の〈物語〉」『漱石作品論集成　第 6 巻』、編者：太田登・木股知史・萬田務、桜楓社
斉藤英雄（1995.4）「「真珠の指輪」の意味と役割―『それから』の世界」『漱石作品論集成　第 6 巻』、編者：太田登・木股知史・萬田務、桜楓社
芹沢俊介・小森陽一・石原千秋（1997.11）－対談「ゆらぎの家族」『漱石研究　特集漱石と家族』第 9 号、翰林書房
水田宗子（1997.11）「夫婦の他者性と不幸―漱石の〈恋する男〉と〈家長〉」『漱石研究　特集漱石と家族』第 9 号、翰林書房

臺灣大學圖書館期刊資料庫

村田好哉（1995.4）「『三四郎』の世界――「森の女」美禰子を巡って――」『漱石作品論集成　第 5 巻』（1991.1 一刷り）編者：玉井敬之・村田好哉、桜楓社

山下悦子（1997.11）「夏目漱石と家族」『漱石研究　特集漱石と家族』第 9 号、翰林書房

吉田幸次郎（1954.3）「漱石三部作の世界」『文学』

臺灣大學學術期刊資料庫